

'Excelsior'と辞典

寺内 孝

Takashi TERAUCHI

本稿は拙論「『エクセルシア』考 ディケンズとロングフェローの一接点」(『ディケンズ・フェロウシップ日本支部 年報 第26号』所収)の続編として書かれたもので、ここでは 'excelsior' という語が諸辞典にどのように記述されてきたかを考察すると共に辞書編集・辞書学 (Lexicography) の一端に踏み込んで辞典に対する理解を深める手だてにしたいと思う。

1 単語 'Excelsior' 登録史

前編で言及したように、ラテン語 'excelsior' がニューヨーク州のモットーに採用されたのは1778年のことである。それゆえにこの語がサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) の『英語辞典 (*A Dictionary of the English Language*)』(1755) に登場しないのは当然であるが、1836年から37年にかけて刊行されたチャールズ・リチャードソン (Charles Richardson) の『新英語辞典 (*A New Dictionary of the English Language*)』にも登場しないのは、その語が社会的に十分な認知に達していなかったことによるのだろう。¹

ノア・ウェブスター (Noah Webster) の『アメリカ英語辞典』(1828)はウェブスターが70歳のときに出版した辞典で、アメリカ向けに2500部、英国向けに3000部それぞれ出版され (Neilson 'PREFACE' p.v)、英国での刊行は1832年である (Ogilvie 1850 ed. 'Preface' p.i)。この辞典にも 'excelsior' は登場しない。

それから2年後の1830年に後述のジョウゼフ・エマソン・ウスター (Joseph Emerson Worcester) が英語辞典を出す、この辞典はウェブスターの側から、剽窃書との批判を浴びせられる。ここから両者の間で34年間に及ぶ「辞書戦争 (the War of the Dictionaries)」が展開されることになるのだが、批判者側のウェブスターは、その緊張の中で1841年にかれの『アメリカ英語辞典』に生前最後の改訂を加えている。この版にもまだ 'excelsior' は登場しない。

一体、ウェブスターはその語を収録しないまま永逝したのであるだろうか。そんなはずはない。後述のように、イギリスのオウグルヴィは、前述のウェブスター辞典41年版を基礎にして辞典編纂し、その語を登録しているではないか。然り。ウェブスターは確かにその語を収録していたのだ。41年版には補遺 (*Supplement to An American Dictionary of the English Language. By Noah Webster*) が出ていたののである。そしてここに確かに 'excelsior' は次のように登録されている。²

EX-CEL'SIOR, *a.* [L.] More lofty; more elevated.

おそらくこの登録が、すべての英語辞典の中で最初であろう。ウェブスターはこの補遺を出した後、43年に他界する。³

ウェブスターの死により、メリアム家のジョージとチャールズ兄弟 (George and Charles Merriam) とが辞典の残部と著作権とを、「ノア・ウェブスター」という名前の独占使用権を除いてウェブスター家から獲得する (Hulbert 29; Neilson 'PREFACE' p.v; Gove 6a)。⁴ そしてこのメリアム社が、ウェブスターの娘婿でイエール大学教授のチャーンシ・グッドリッチ (Chauncey A. Goodrich) を編者に立てて47年に『アメリカ

英語辞典』の増訂版 (Revised and Enlarged by Chauncey A. Goodrich. 1849. 1 vol. 但し
著作権は1847年) を出す。次いで59年、同義語の追加と挿絵の刷新を行い、64
年に、のちにイエール大学の学長となるノア・ポーター (Noah Porter) を編集主幹に
迎えて改訂増補版『アメリカ英語辞典 (An American Dictionary of the English Language.
Thoroughly revised and improved by Chauncey A. Goodrich and Noah Porter) 』を完成する
(Neilson 'PREFACE' pp. iv-v)。この最後の辞典がウスターの『英語辞典』を凌ぐこ
ととなり、34年間の辞書戦争が決着するのである。ちなみに、47年版と64年版
で 'excelsior' は順に以下のように定義される。

- a. [L.] More lofty; more elevated; higher; the motto of the State of New York.
a. [Lat., comparative of excelsus, elevated, lofty, p.p. of excellere. See
EXCEL.] More lofty; still higher; ever upward.

上の引用にあるように、ラテン語の英語化への起源である「ニューヨーク州のモッ
トー」が47年版で記されている。おそらくこの記述があらゆる辞典の中で最初のも
のであろう。だが、なぜかこれは64年版で削除されている。

ウェブスター辞典に次いで 'excelsior' を登録した第2番目 筆者の調査範囲内
のことだが (以下同断) の辞典はイギリスのジョン・オウグルヴィ (John Ogilvie)
の『帝国辞典 (The Imperial Dictionary) 』である。この辞典は分冊刊行の形をとり、
最初の出版は1847年1月、最後のそれは50年1月、次いで出された補遺も分冊
刊行であったようで、最初の出版は1854年、最後のそれは翌55年である (Ogilvie
1899 ed. 'Preface' p. i)。本巻の合本は全2巻で1850年に、補遺は全1巻で185
5年に出版された。

この辞典の大きな特色は、オウグルヴィが辞典の表題で明記しているように、ノア・
ウェブスターの辞典、すなわちウェブスターの生前最後の改訂版である1841年版
当然にこの版の補遺を含めてのことと思われる を基礎に編集されたことであ
る (Ogilvie 1899 ed. 'Preface' p. i)。オウグルヴィがウェブスター辞典に依拠した理由
は、かれが辞典の「序文」で記しているように、当時の主要辞典、すなわちジョンソ
ンの辞典、リチャードソンの辞典、ウェブスターの辞典の内、ジョンソンの辞典はい
くらかの点で非常な欠陥があったこと、リチャードソンの辞典は実用辞典というより
も批評辞典であり、一般読者向けというよりも言語学徒向けであったこと、これらに
比してウェブスター辞典は前二者を凌駕するばかりか、これまでに出版されたどんな
辞典よりも語彙、定義、計画、語源の点ですぐれているということが英米で承認され
ていたことによる。⁵

オウグルヴィが辞典編纂に際して最大の眼目としたことは、辞典を文学・科学・芸
術の現状に適應させることであり、それゆえにウェブスター辞典の誤りを修正し、不
足を補うことにあった (Ogilvie 1850 ed. 'Preface' p. iii)。この辞典で 'excelsior' は本
巻に登録され、'a. [L.] More lofty; more elevated.' と定義されているのだが、これは疑
いもなく、ウェブスター41年版補遺からの転用である。⁶

'Excelsior' を登録した3番目の辞典は、アメリカのジョウゼフ・エマソン・ウスタ
ーの辞典とイギリスのハイド・クラーク (Hyde Clarke) の辞典で、どちらも1855
年の刊行である。まずウスターから論述することにする。

ウスターはイエール大学で学び、ノア・ウェブスターの後輩にあたるが、ウェブ
スターのライバルとなる人である。ウスターは大学卒業後、地理学を専門にし、『地
理学辞典 (A Geographical Dictionary) 』(1817)などを著したが、のちに言語学に
転じ、1828年に『トッドの改善、チャーマーズの要約によるジョンソンの辞典に、

ウォーカーの発音辞典を結合せる辞典(*Johnson's English dictionary, as improved by Todd, and abridged by Chalmers: with Walker's pronouncing dictionary, combined; ...*)』を、29年にはウェブスター辞典の出版者であり、同時にウスターの友人でもあるシャーマン・コンバース(Sherman Converse)の勧めを受け、不承不承ながらウェブスター『アメリカ英語辞典』(1828)の要約辞典を、翌30年にはかれ独自の『総合発音解説英語辞典(*A Comprehensive Pronouncing and Explanatory Dictionary of the English Language*)』(1830)をそれぞれ出版する。

上記ウスターの1830年の辞典は好評で、例えば1856年から63年までの7年間では5万7000部も出るほどであったのだが、先述のように、この辞典こそ出版直後にウェブスター側から剽窃の批判を浴びせられるのである。ウスターはその年(30年)の内に諸攻撃を論破するが、争いは終息されるどころか34年11月、『ウスター・パレイディウム(*Worcester Palladium*)』誌がウスターの辞典を「大剽窃(*gross plagiarism*)」と決めつけたことで、ウェブスターとウスターの間で論争の火がつく(*American National Biography* q.v. *Worcester*; Burkett 222)。

この争いの渦中で、ウェブスターが41年に生前最後の改訂版を出したことは先述の通りであるが、片やウスターは46年に『普遍決定的英語辞典(*Universal and Critical Dictionary of the English Language*)』を出版し、47年と49年には前記『総合発音解説英語辞典』を増補改訂し、さらにこれを55年に『英語発音解説同義語辞典(*A Pronouncing, Explanatory, and Synonymous Dictionary of the English Language*)』と改題する。そして1860年に図解数1000、語彙数10万4000という、この種の辞典では図解数・語彙数ともアメリカ初となる大著、『英語辞典(*A Dictionary of the English Language*)』を完成させる。それから5年後の1865年、ウスターは81歳で他界するが、かれの著した諸辞典は、当時の保守的で教養ある人々の間で人気を博することになる。だがライフワークとなった『英語辞典』は、その出版社がウェブスター辞典のメリアム社ほどには活力的でなかったために「辞書戦争」は、前述のように、ウェブスター辞典64年版の出現で敗北する。

ちなみに、ウスターは辞典に挿絵を入れているが、この手法はウェブスターに倣ったもので、後述の『センチュリー辞典』も同様、アメリカの主要辞典は言語辞典であるとともに百科全書的「事典」の性質を備えるのであり、イギリスの言語辞典(*OED*のような)とは性格を異にする(市河 354-355)。

ウスターの辞典における'excelsior'の登録について言えば、30年の『総合発音解説英語辞典』と46年の『普遍決定的英語辞典』では共に未登録、55年の『英語発音解説同義語辞典』で初めて現れ、'a. [L.] Higher, more elevated'、そして60年の『英語辞典』で'a. [L.] More lofty. Longfellow'とそれぞれ定義されている。⁷ これら二つの定義では共に「ニューヨーク州」への言及はないが、60年版で、英語辞典では恐らく初めて「ロングフェロー」に言及している。本来ならばこれら両方に言及してこそ言語辞典の有用性が高まるというものだが、ウスターには「ニューヨーク州」に言及しにくい理由があったのだ。もしそうすれば、ウェブスター47年版はすでにそれに言及していたから、ウスターは再びウェブスター側に攻撃材料を与えることになったからだ。他方、ウスターが「ロングフェロー」に言及した理由は、ロングフェローの詩「エクセルシア」(1841)がすでに一定の社会的評価を得るようになっていたことと、興味深いことに、ロングフェローとウスターとは41年5月頃から44年4月までの3年間、かの「クレイギー・ハウス」で同居人であったことにもよる(別稿「クレイギー・ハウスを巡る人々」参照)。

次に1855年にイギリスで刊行されたハイド・クラークの『新総合英語辞典(*A New and Comprehensive Dictionary of the English Language*)』であるが、ここでは'excelsior'

は 'L. more lofty, higher; motto of New York.' と定義されており、この定義にはウェブスター 47 年版を越えるところはないが、イギリスの辞典では恐らく最初に「ニューヨークのモットー」に言及したことになる。この辞典は 8 版（1881 年）まで重版され（Kennedy 239）、ウスターの「英語辞典カタログ」（Worcester lxi）にも登場するが、その割には著者クラークを含め、この辞典のことはほとんど知られていない。⁸ 判型（Format）は 16 折り判（sixteenmo）（114 x 175 mm）、頁数は 466 と小冊だが、活字サイズは 6 ポイントと小さめであるために収録語数は意外に多く、「序文」によると 10 万語以上である。⁹ この数字だけに着目すれば、オウグルヴィの『帝国辞典』やウスターの『英語辞典』に比肩しうるものだ。クラークは辞典編纂にあたり、ジョンソン、ウェブスター、リチャードソン、ボズワース（Bosworth）を参考にし、資料の収集ではベン・ジョンソン（Ben Johnson）、ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）、ベイリ（Bailey）、シェリダン（Sheridan）、ディケンズ、ブルワー（Bulwer）、サッカレー（Thackeray）、ロングフェロー、『タイムズ』（"Times"）、『パンチ』（"Punch"）、・・・に手を伸ばしている（Clarke 'Preface' pp.ix-x）。ケネディの書誌によれば、初版はロンドンの John Weale とあるが、筆者所蔵の版はロンドンの Bradbury and Evans であるから、両社から出版されたのであろう。¹⁰

アメリカで、1889 年から 91 年にかけてウィリアム・ホイットニー（ウィットニー）（William Dwight Whitney）他編『センチュリー辞典（*The Century Dictionary*）』が誕生している。この辞典の端緒は 1882 年初めにセンチュリー社の社長スミスが、オウグルヴィ著、アナンデイル（Annandale）増訂『帝国辞典』（1882 - 83）をアメリカの必要性に適応させることを提案したことにあつた。辞典づくりの目標は文学・実用の両面で役立つことに置かれ、より完全な専門語の収集、便利な参考書となるようなイラストつきの百科全書的内容の、厳密な意味での定義をつけることに注意が払われている（Whitney 'Preface' p. v）。編集段階で『帝国辞典』の出版社ブラッキー・アンド・サン社（Blackie & Son）の許可を得てその資料が自由に使えるように配慮されたことから（Whitney 'Preface' p. ii; Hulbert 33）、辞典の系譜をたどれば Webster（アメリカ）-- Imperial（イギリス）-- Century（アメリカ）となる。

『センチュリー』の初版は全 6 巻であるが、1894 年に B. E. スミスの固有名詞辞典 1 巻が加えられたことと、本巻に絶えざる改訂が加えられたことにより、95 年刊は全 10 巻である。¹¹ さらに 1906 - 09 年に補遺 2 巻が追加され、1911 年の B. E. スミスによる改訂増補版は全 12 巻である（Kennedy 241, 329, 池浪 909-910、石橋 266）。『センチュリー』の刊行中、イギリスでは OED も刊行中（1884 年 1 月 - 1928 年 4 月）であったから、『センチュリー』は当然それを意識したと思われる。以下は『センチュリー』初版の 'excelsior' の定義である。

excelsior, *a.* [*L. excelsior*, masc. and fem. compar. (neut. excelsius) of excelsus, elevated, lofty, high, pp. of excellere, rise, be lofty, be eminent: see excel.]
Loftier; more elevated; higher: the motto of New York State, hence sometimes called the
Excelsior State.

From the sky, serene and far,
A voice fell, like a falling star,
Excelsior! Longfellow, Excelsior.

excelsior, *n.* [*< excelsior, a. >* The trade-name of a fine quality of wood-shavings, used as stuffing for cushions, beds, etc., and as a packing material.]

この定義で特徴的なことは、ニューヨーク州の標語が同州の別称の原因となったこ

とに恐らく初めて言及したこと、ロングフェローの詩の一部を引用してロングフェローとこの語との関係を例証したこと、派生語義の名詞に見出し語の地位を与えたことである。

『オックスフォード英語辞典 (*The Oxford English Dictionary*)』もまた分冊刊行で、第1分冊 (A-Ant) は1884年、'excelsior' が収録された第21分冊は1894年にそれぞれ出版された。この辞典で、以下の引用に見るように、'excelsior' にかかわる既存の定義がすべて吸収され、それらが歴史的・分析的に記述されるとともに、用例が刊年典拠つきで歴史順に提示されたのである。これによってわれわれは単語 'excelsior' の起源、成長、衰退の全容を把握することができるのであり、「歴史主義」の真価を存分に知らされることになる。

Excelsior. [L., compar. deg. of *excelsus* high: see EXCELSUS.]

1. a. The Latin motto ('higher') on the seal of the State of New York (adopted by the senate of that state 16 Mar. 1778), the accompanying device of being a rising sun. Hence *attrib.* in *The Excelsior State*, New York. b. Used by Longfellow (quasi-*int.* as an expression of incessant aspiration after higher attainment) as the refrain of a popular poem; hence employed with similar sense by many later writers.

.....

- 1778 *Drawing of Seal in N. Y. Senate Rep.* (1881) No.61 Excelsior. 1841 LONGF. *Excelsior* 30 A voice replied, far up the height, Excelsior!
2. Often used as a 'trade-mark', and *attrib.* in the names given by tradesmen to special articles of manufacture; also in the titles of various periodicals in U.S. and in England. 1851 *Catal. Grt. Exhibition III.* 1467 Excelsior soap [An American exhibit]. 1888
3. U.S. A trade name for short thin curled shavings of soft wood used for stuffing cushions, mattresses, etc. Also *attrib.* in *excelsior-machine*. 1868 1884

2 ウェブスター 2 版・3 版

メリアム (G. & C. Merriam) 社の1864年版『アメリカ英語辞典 (*An American Dictionary of the English Language*)』はメリアム・ウェブスター・シリーズでは一般に *Unabridged* として知られる (Neilson 'PREFACE' p.v)。1890年以後で主要な版は以下のものである。

Webster's International Dictionary of the English Language. (1890)

Webster's New International Dictionary of the English Language. (1909)

Webster's New International Dictionary, Second Edition, Unabridged. (1934) (第2版)

Webster's Third New International Dictionary of the English Language, Unabridged. (1961) (第3版)

(Neilson 'PREFACE' pp.iv-vi; Gove 6a 'footnote')

上記第2版では以下の引用に見るように、『センチュリー』同様、'excelsior' の見出し語は2語に分割されているのだが、これら以外に、'excelsior' にかかわる見出し語句はなお3つ掲げられている。

excelsior, *adj.* [L., compar. of *excelsus* elevated, lofty, past part. of *excellere*. See EXCEL.] More lofty; still higher; ever upward; -- used as a motto, and [*cap.*] as the title of a poem (1841) by Longfellow.

excelsior, *n.* 1. A material of curled shreds of wood used for stuffing upholstered furniture, for packing, etc. 2. *Print.* A small size of type (3 points), seldom used.

Excelsior diamond. See DIAMOND, 1a.

excelsior knife. See KNIFE, 3, *Illust.*

Excelsior State. New York; -- from the motto "Excelsior" upon its coat of arms.

この定義で顕著なことは、1、'excelsior' が形容詞と名詞とに分割提示されることによって二つの単語間の意味上の連続性が遮断されるという非論理性に陥っていること、2、ラテン語の英語化起源が「ニューヨーク州のモットー」にあることを説明しきれないこと、3、語彙拡大の歴史的な経緯が判然としないことである。

現行のメリアム・ウェブスター大辞典第3版 (*Webster's Third New International Dictionary of the English Language, Unabridged*. 1961) は、収録語数が45万語以上であるが (Gove 7a)、この数は第2版 (55万語以上) より激減している。その理由の多くは、スペースの制約からくる単語の厳選にあったのである。すなわち、実体のない、消滅しかかっている語、比較的無用であるか曖昧な語、廃語となった語などがすべて削除される一方で、言語の中に一つの地位を得た新語が追加されたのである (Gove 6a)。¹² この結果、第3版では 'excelsior' の定義は大幅に削除され、以下のものしか残されていない。

n -s [L, higher, comparative of *excelsus*]: fine curled shavings of wood forming a resilient mass and used esp. for packing fragile items (ピリオドなし)

この定義が表明していることは、第3版は現代語辞典であって、19世紀以前の英語読者には不適切ということである。

3 辞典の歴史主義

OED が立脚する「歴史主義」は先哲の業績に負っていることは論を俟たない。その主たるものの幾らかは、サムエル・ジョンソンの辞典とチャールズ・リチャードソンの辞典である。ジョンソンの辞典 (1755) では語義が、年代順に提示された用例によって例証されているし、リチャードソンの辞典 (1836 - 37) では語義が通時的に展開され、文献例も年代順に配列されている (池浪 901、石橋 265, Richardson 'Preface' 51-52)。以下にこれら二つの辞典から 'AVOW' の例を採り上げてその記述法を部分的に引用し、説明の一助とする。

To AVOW. *v.a.* [*avouer*, Fr.] To declare with confidence; to justify; not to dissemble.

His cruel stepdame *Fairy Queen* (引用文は全部で3行あるが以下略)

He that delivers them *Boyle* (引用文4行、以下略)

Left to myself, I *Dryden* (引用文2行、以下略)

Such assertions proceed from *Swift* (引用文2行、以下略)

Then blaz'd his smother'd *Thoms.* (引用文1行、以下略)

AVO´W, v.

AVO´W, n.

AVO´WABLE.

AVO´WAL.

AVO´WED.

AVO´WEDLY.

AVO´WER.

AVO´WRY.

Fr. *Avouer*. See AVOUCH, and also Vouch and Vow. Lat. *Vo-
vere*, to vow, or promise.

To promise, or declare, strongly or loudly; to protest or affirm.

(以下に R. Brunne, Wiclif などから用例 14 を年代順に提示)

これら二つの辞典は、その記述法においてある程度 *OED* の原形をなしている。また、歴史主義についてはリチャードソンが、かれの辞典の「序文」の中で「言葉の完全な歴史はかれら（文法家と辞書編集者）の協力し合った労働の成果とならなければならない」（Richardson 'Preface' 59）と主張し、のちに出てくる辞典の歴史主義に先鞭をつけている。そのリチャードソンの辞典について『クオータリ・レビュー（*The Quarterly Review*）』誌は「語の伝記、生まれ、血統、教育、それまでの諸変化、交際、諸関係を、年代順の豊富な用例によって示している」（Worcester lvii）と評しているように（Murray vii, xiv; *Americana* 9-90）、¹³ 歴史主義の原点は大いにリチャードソンに負っている。

OED の歴史主義に道を開いた主要人物はウェストミンスター寺院主任司祭リチャード・シェネヴィクス・トレンチ（Richard Chenevix Trench, Dean of Westminster、後に大主教 archbishop）（1807 - 1886）である。かれは1857年、ロンドン言語学会（Philological Society of London）において「英語辞典におけるいくらかの欠陥について（On some Deficiencies in our English Dictionaries）」を発表し、語形・語義の歴史を記述した辞典の欠如を指摘して歴史主義に立つ辞典の必要性を説いている。翌58年、語の収集対象を、紀元1000年ごろ以後のすべての語と決めて収集の作業を開始し、84年1月に *OED* の第1分冊（A-Ant）が、1928年4月に第125分冊（Wise-Wyzen）がそれぞれ刊行された（Murray xxv-xxvi）。実に、トレンチの主張後70余年後の完成である。この間、編集主幹を務めた人は Coleridge - Furnivall - Murray - Bradley - Craigie - Onions で、これらの内、Coleridge（詩人 Coleridge の孫）は1861年に、Murray（全巻の約半分を担当）は1915年に、Bradley（E, F, G, L, ... などを担当）は1923年に、それぞれ全巻の完成を見ることなく他界している。合冊によって全10巻とされたが、1933年には補遺3巻が加えられた（Murray vii-xxvi; *Americana s.v. Dictionary*、市河 644-645、石橋 266、ハートマン 156-158、etc.）。

アメリカでも *OED* の思想を引き継いで歴史主義に立つ辞典が作成された。*OED* 編集主幹の一人、英人ウィリアム・アレグザンダー・クレイギー（William Alexander Craigie）が、1938年以来シカゴ大学のハルバート（James Root Hulbert）と組んで『歴史主義アメリカ英語辞典（*A Dictionary of American English on Historical Principles*）』（1938 - 1944）を、さらにマシューズ（Mitford M. Mathews）が『歴史主義アメリカ英語辞典（*A Dictionary of Americanisms on Historical Principles*）』（1951）をそれぞれ出版した。前者は、1900年までのアメリカ起源の英語とアメリカにおける重要語を収集し、後者はアメリカ起源の5万語を収録している（*Americana s.v. Dictionary*；市河 304-305, 351-355、石橋 267）。以下にこれら二つの辞典から順に 'excelsior' の定義を引用しておく。

+Excelsior. [L., comp. of *excelsus*, 'high.']

1. 'Higher,' the Latin motto adopted by New York for its state seal.
(以下に 1778 の用例)
b. *Excelsior State*, New York.
(以下に 1871 の用例)
2. Fine shavings of wood used as a packing material and for stuffing cushions, mattresses, etc.
(以下に 1869, 1884, 1887, ... 1909 の用例)
3. Often used attrib. in sense 1 b, and in names of things regarded as superior.
{1851-} Also absol.
(以下に (a) 1862, (b) 1863, 1870, 1894 の用例)

excelsior, *a.* and *n.* [L., higher.]

1. *n.* (*cap.*) The motto of New York State. Hence **Excelsior State**, New York.
(以下に 1778, 1871, 1948 の用例)
2. Fine shavings of wood used as a stuffing for cushions and mattresses, and as a packing material.
(以下に 1868, 1905, 1948 の用例)
3. *a.* Possessing superior qualities. Also absol.
(以下に 1851, 1862, 1870, 1894 の用例)

これら二つの定義からアメリカ起源のこの語はアメリカにおいては「すぐれた」という観念を表現するためにも使用されたことが分かるのだが、それとともにこれらの定義がなおも示唆していることは、歴史主義の辞典というものはきわめて限定的にはあるが、その時々々の社会の断面を覗き見ないし推理させる効用がある、ということである。

4 主要辞典の収録語数

上記辞典を中心に以下にその収録語数を記すことにする。

ジョンソン 『英語辞典』 (1755)	・・・4万3500
上記のトッドによる増訂版 “トッドのジョンソン辞典” (Samuel Johnson, <i>Dictionary of the English Language. With numerous corrections ... by the Rev. Henry J. Todd.</i>) (London: Longnam, Hurst <i>et al.</i> [1815]-1818. 4 vols.)	・・・5万8000
ウェブスター 『アメリカ英語辞典』 (1828)	・・・7万
ウスター 『総合発音解説英語辞典』 (1830)	・・・4万3000
リチャードソン 『新英語辞典』 (1836 - 37)	・・・?
ウスター 『普遍決定的英語辞典』 (1846)	・・・8万3000
ジョン・オウグルヴィ 『帝国辞典』 (1847 - 50)	・・・8万、補遺(1854 - 55) 2万
ハイド・クラーク 『新総合英語辞典』 (1855)	・・・10万以上
ウスター 『英語辞典』 (1860)	・・・10万4000
ウェブスター 『アメリカ英語辞典』 (1864)	・・・11万4000
ウェブスター大辞典 1890年版	・・・17万5000
ウェブスター大辞典 1909年版	・・・40万
ウィリアム・ホイットニー 『センチュリー辞典』 (1889 - 91)	

・ ・ ・ 20万、(1911)53万
 マリ他『オックスフォード英語辞典』(1933) ・ ・ ・ 見出し語24万
 165、従見出し語6万7105、結合10万7555(合計4
 1万4825)
 ウェブスター大辞典第2版(1934) ・ ・ ・ 55万以上、巻末
 の地名・伝記事典などの項目を加えると60万以上
 ウェブスター大辞典第3版(1961) ・ ・ ・ 45万

(市河 304-305、351-355、池浪 900,908-911、石橋 264-266、大塚・中島 375-376、
 ハートマン 158、*Americana s.v. Dictionary*, Neilson 'PREFACE' v-vi,
 Ogilvie 1899 ed. 'Preface' iii)

5 研究社大英和辞典など

'Excelsior' にかかわって、わが国の代表的な英和辞典『研究社新英和大辞典』を瞥見することにする。この辞典の主要改編年は以下のものである。

1927年(昭2) 岡倉由三郎編(初版)
 28年 訂正版
 33年 増補訂正版
 36年 (第2版)
 50年 改訂増補版(ここまでが岡倉由三郎「編」ないし「主幹」)
 53年 研究社英和大辞典編集部編;市河三喜・岩崎民平・河村重次郎編集主幹(第3版)
 60年 岩崎民平、河村重次郎編(第4版)
 80年(昭55)小稲義男編集代表(第5版)
 2002年(平14)竹林滋編者代表(第6版)

この辞典は初版で 'excelsior' を以下のように定義している。

1 .*int.*(商標又は標語として)更に高く!(=still higher!),常に向上!(=ever upward!).¶*Excelsior State*(米國の)New York州(此州の紋章に'Excelsior'という標語が附けてあることから). 2 .*n.*(米)(詰物用の)鉋屑、上等木屑。
 [L, compar. of *excelsus* (*ex-* + *celsus* lofty)].

この定義は、版間で多少の異同はあるが、50年版までは大筋において変わらない。第3版になって「*int.* ……」は「*adj. L.* ……」に変わり、新たに名詞の「活字の一種(3ポイント)」が現れ、第5版で、第4版の「*L. adj.*(標語として)更に高く!(still higher!)、向上の一路(ever upward!)(米国ニューヨーク州の標語)」が削除され、第6版でこの削除が「*int.* より高く」として復活している。ここから言えることは、1、「活字の一種(3ポイント)」が第3版で初出とは遅すぎる。なぜならこの語義は、*OED* では1902年が初出であり、わが国の辞典では三省堂編輯所編『三省堂英和大辞典』(1928[昭3])と市河三喜・畔柳都太郎・飯島廣三郎著『大英和辞典』(富山房、1931[昭6])がすでに登録しているからである。¹⁴ 2、第5版で「*L. adj.* ……」が削除されたことは、ただの一定義とはいえず、この版では19世紀の英語が読めない

ことを示している。ちなみに英和辞典はすべて、紙幅の関係上、新語を採り入れて古語を排する宿命にあるからその性格はつねに現代語辞典といわなければならない。3、全ての版を通じてロングフェローには言及していない。

出版年が古く、今日（2002年現在）なお購入可能である辞典に齋藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』（1915[大4]）（岩波書店、1933[昭8]、増補新版1936）がある。初版は1915年であるから辞典としては異例のロング・セラーであるのだが、“excelsior”を「【形】（=still higher）向上的（米國 New York 州の警句）」と定義しているのを見ると、「向上的」と「警句」という表現には改善が必要であろう。

6 結語

OED の出現によってわれわれは単語 'excelsior' の全体像を歴史的に知りうるようになったことは先述の通りである。だが、これで満足することはない。スペースが許しさえすれば、なお多くの情報を盛り込むことが可能である。たとえば、この語が1787年発行のニューヨーク州の銅貨に鑄込まれたことや（Alexander 67）、ロングフェローの詩「エクセルシア」がマイケル・バルフ（Michael Balfe）によって作曲化されたことに言及されてよいし、用例の中にディケンズの使用例が含まれてもよい。さらにこの語に関連して、ヴィクトリアンの俗物根性としての 'higher' への憧憬や、サッカレーが『イギリス俗物誌』で皮肉った、『貴族名鑑』『大いなる遺産』におけるベリнда（Belinda, or Mrs. Pocket）の愛読書でもある を第2の聖書とするようなヴィクトリアンの俗物性に言及されてもよい。要は、OED は記述言語の全体（約1000年間）を網羅しようとする通事的辞典であり、それ故に、そこから来る一つの時代性の欠如が否めないのである。OED の編者の一人、W. A. クレイギー（William Alexander Craigie）が1919年にロンドンの言語学会で共時的辞典、すなわち「時代辞典（period dictionary）」を提唱したのはこの理由によるのだ。そしてこれに呼応する動きが、1930年にミシガン大学で開始された『中世英語辞典（Middle English Dictionary）』の取り組みであった（市河 304、石橋 267、田島）。

クレイギーは「時代辞典」の一つに、1675年頃以後の言語を対象とした辞典についても言っているのだが、かれの指摘に加え、オウグルヴィの言う19世紀英語の変容や、¹⁵ 18、19世紀の英語の難解さに直面するとき、この時代を対象とした「時代辞典」、すなわち言語の実態を記録・定義するとともに、人間生活の一面をも垣間見ることのできるような社会言語辞典が実現されてよいだろう。

他方、論題の単語 'excelsior' を、歴史主義に立つ OED の記述に抛りながらその全体像を描こうとするとき、こうなるであろう。その語は1778年に英語に移入されて以来約200年間、時代精神を的確に言い表す言葉として多用されたが、今日においては標語や書名の適用は往年の比ではないし、商標、詰め物用の木毛、3ポイント活字のための 'excelsior' はもはや過去の遺物となりつつある。この状況を、語の生命という観点から見たとき、その最も旺盛な活動期を通り過ぎ、今や老境に入った感がある、と。

その運命の成り行きは奇しくもロングフェローに通じる。今日、ロングフェローの文学はロウエル（Lowell）やハウムズ（Holmes）のそれと同様、「生きた存在でなくなってしまった」のだ。¹⁶ 時は移り行きぬである。

謝辞

資料収集で特に次の諸機関・個人にお世話になりました。記して謝意を表します。京都大学、橘女子大学、京都外国語大学、梅花女子大学、英知大学、岐阜大学の各附属図書館、滋賀県草津市立図書館、Taran Schindler (米・ニュー・ヘイヴン)、John J. McCormick (米・コンコード)、Betty Tonglao (米・シアトル)。

注

本稿はディケンズ・フェロウシップ日本支部2002年度秋期大会(10月5日、於甲南大学)において口頭発表した原稿に加筆・修正を行ったものです。

- 1 ジョンソンの辞典はその基礎を Nathaniel [or Nathan] Bailey, *Dictionarium Britannicum* (1730) に負い、語源については大部分 Stephen Skinner, *Etymologicon Linguae Anglicanae* (1671), Francis Junius, *Etymologicum Anglicanum* (1743) からの採用である(Kennedy 224[no.6220]; 石橋 264; 大塚・中島 374-75)。ジョンソンは、辞典の第2版以後多少の改訂を加えたが、実質的な改訂版は第4版(1773)で、生前に6版重ねた(Kennedy 230-231; 永嶋 66, 89)。リチャードソンの辞典は、1818(または1819)年以来 *Encyclopaedia Metropolitana* 誌上に連載された "an English lexicon" に始まる。連載完結後リチャードソンはこれに改訂増補を行い、1835年-37年に分冊刊行、1836-37年に2巻本辞典としている(*Dictionary of National Biography*; Kennedy 230 [no. 6365]; *OED* Vol.1, p.vii)。
- 2 補遺には刊年の記載がない。43年刊であろうか。
- 3 ウェブスターの死はコネティカット州地方裁判所の書記事務所であったから、その死は急死に近かったのかもしれない。
- 4 メリアム社のウェブスター辞典に対する著作権は1889年に失効し、これ以後、「ウェブスター」の名は自由に使えるようになった。
- 5 "The principal dictionaries of the English language in use at present, are Johnson's, first published in 1755; Richardson's, commenced in 1826; and that of Webster, of America, first published in this country in 1832 Webster's dictionary, which forms the basis of the present work, is acknowledged both in this country and in America to be not only superior to either of the two former, but to every other dictionary hitherto published. It is more copious in its vocabulary, more correct in its definitions, more comprehensive in its plan, and in the etymological department it stands unrivalled." (Ogilvie 1850 ed. 'Preface' pp. i, ii)
- 6 オウグルヴィ 『帝国辞典』のチャールズ・アナンデイルによる増補改訂版『帝国英語辞典』(1882-83)はロンドンなどに社を置く Blackie & Son とニューヨークの The Century Co. の両社から(Kennedy, p.239, no.6553)、そしてその1899年版はロンドンの The Gresham Publishing Com. からそれぞれ出版された。この増訂版における 'Excelsior' の定義は初版よりも詳しく以下のようである。Excelsior, a. [L., compar. degree of *excelsus*, lofty--ex, intens., and *celsus*, lofty. See *Excel.*] Loftier; more elevated; higher.
- 7 ウスターの『英語辞典』は1881年に「約12,500語を追加し、同意語表を付したが、最終版(1886)にはほとんど改訂の跡は見られない」(『大修館英語学事典』1983、909頁)。ウスター『英語辞典』(1860)(四つ折り版 [quarto] 一巻本)の復刻本は2000年6月、ゆまに書房から出た。

- 8 ケネディの書誌によれば、著者クラークにはこの辞典の他に次の著書がある。A *Grammar of the English Tongue, Spoken and Written; for Self-Teaching and for Schools* (1853); *Dictionary of the English Language* (1865); *The Globe Dictionary of the English Language as It is Spoken and Written* (1887); *The English Language in India and the East* (1890). これら以外にもトルコ語学習や銅の製錬などに関する著書があるのだが、かれについての情報は、ウスターの「カタログ」(Worcester lxi) とケネディの書誌を除けば、わが国の文献は言うまでもなく、*Dictionary of National Biography* を含む英米の文献から得ることは難しい。筆者の知る限り、わが国の文献でハイド・クラークの辞典に言及しているのは唯一、林哲郎『英語辞書発達史』で、巻末「附録 III. 年代順辞書類一覧表」に刊年、著者名、書名を記している。ちなみに、ハイド・クラークのフルネームは Henry Hyde Clarke で、1814年ロンドンに生まれ、1895年同地に没している。多彩な才能の持ち主で、100種類の言語に通じたと言われるほか、鉄道測量、London and county bank や Council of foreign bondholders の創設 (Frederic Boase, *Modern English Biography*)、Joseph E. Worcester, *A Dictionary of the English Language* の "History of English Lexicography" (Worcester liii-lvii) への関与などしている。
- 9 It [this dictionary] includes far above a hundred thousand words, and at least sixty thousand more than any dictionary that has yet been published, reckoning the number of words by the same standard as in other dictionaries.
- 10 クラークの辞典の後にナトール (P. Austin Nuttall) の辞典、*The Standard Pronouncing Dictionary of the English Language; Based on the Labours of Worcester, Richardson, Webster, Goodrich, Johnson, Walker, Craig, Ogilvie, Trench, And Other Eminent Lexicographers*. London: Routledge Warne & Routledge, 1863. が出ているが、これには 'excelsior' の登録はない。
- 11 表紙裏頁の "PUBLISHERS' NOTE ON THE COMPLETED WORK" に次の記述がある。"The first edition of The Century Dictionary was completed in 1891, that of The Century Cyclopedia of Names in 1894, and that of the Atlas in 1897. During the years that have elapsed since those dates each of these works has been subjected to repeated careful revisions, in order to include the latest information, and the results of this scrutiny are completed in this edition."
- 著者所蔵の1906年刊は1889年刊のリプリント版で、AからZまでが全8巻、第9巻は *The Century Dictionary and Cyclopedia* Vol. IX (*The Century Cyclopedia of Names*) (筆者所蔵の1899年刊の第9巻は1085頁、1906年刊の第9巻は巻末に補遺65頁が追加されて1150頁)、第10巻は *The Century Atlas of the World* (1906) で全10巻 (In Ten Volumes)。1909年に補遺2巻 (*The Century Dictionary and Cyclopedia. New Volume*[2 vols.]、すなわち *The Century Dictionary Supplement. Vol. XI, Vol. XII*) が追加されて全12巻となる。この補遺の表紙裏頁に先に引用した "PUBLISHERS' NOTE ON THE COMPLETED WORK" があり、そこに次の記述がある。"The first edition of The Century Dictionary was completed in 1891, ... and that of the Atlas in 1897, and that of the two new volumes in 1909." 他方、ケネディの書誌 (Kennedy 241 [no.6584]) に "1889-91. 24 pts. in 6 vols. Also publ. 1895, 1899, ... 1906-9, 1911, etc." とあるのは初版は24分冊全6巻の形を取ったということだろう。
- 12 2版・3版に関するより詳しい情報については永嶋大典『英米の辞書』(151-155頁) 参照のこと。

- 1 3 *The Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900* で典拠を調べたが解明できなかった。ちなみにリチャードソン辞典の批評を含む *The Quarterly Review*. Volume 54 (September 1835) を通読したが、これは典拠でないことが判明した。
- 1 4 三省堂編では“ [印] 活字ノ大ヲ名 [3 ばいんと相当、稀ニ樂譜印刷等ニ用ヅル] ”、市河三喜・他編では“ [印] 三ポイント活字 ” と定義されている。
- 1 5 "For a number of years past a great revolution has manifestly been going on in the English language. Many words and terms formerly current have now passed into oblivion; many others have acquired new meanings ...; and thousands of words and terms have been introduced into our language which were altogether unknown in the time of Johnson, or even at a considerably later period." (Ogilvie 1850 ed. 'Preface' p. i)
- 1 6 朱牟田夏夫・他編 『18 - 19世紀英米文学ハンドブック』南雲堂、1966年、515頁。

参考文献

- 石橋幸太郎編 『現代英語学辞典』成美堂、1973。
- 市河三喜編 『英語学辞典』研究社、1974。
- 大塚高信、中島文雄 『新英語学辞典』研究社、1982。
- 鹿島祥造 『英語の辞書の話』講談社、1967。
- 田島松二 「完成間近い *Middle English Dictionary*」 『英語青年』1991年4月号：34 - 36頁。
- 永嶋大典 『英米の辞書』研究社、1974。
- 永嶋大典 『英米の辞書案内』研究社、1985。
- ハートマン、R. R. K. 編 『辞書学』三省堂、1984。
- 林哲郎 『英語辞書発達史』開文社、1968。
- 松浪有、池上嘉彦、今井邦彦編 『大修館英語学事典』大修館書店、1983。
- Alexander, David T. ed. *Comprehensive Catalog and Encyclopedia of United States Coins*. New York: World Almanac, 1990.
- Burkett, Eva Mae. *American Dictionaries of the English Language Before 1861*. Metuchen & London: The Scarecrow Press, 1979.
- Clarke, Hyde. *A New and Comprehensive Dictionary of the English Language; As Spoken and Written*. London: John Weale, and Bradbury and Evans, 1855.
- Craigie, William Alexander and Hulbert, James Root. *A Dictionary of American English on Historical Principles*. 4 vols. Chicago: The University of Chicago Press, 1938-1944.
- Encyclopedia Americana*. New York. 1966 ed.
- Gove, Philip Babcock, et al. *Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged*. Springfield: G. & C. Merriam Company, 1966, 6a-7a.
- Hulbert, James, Root. *Dictionaries: British and American*. Rev. ed. Tonbridge: Tonbridge Printers LTD, 1968.
- Johnson, Samuel. *A Dictionary of the English Language: In Which the Words are deduced from their Originals, and Illustrated in their Different Significations by Examples from the best Writers. To which are Prefixed, A History of the Language, and An English Grammar*. 1755. London: Times Books, 1979.
- Kennedy, Arthur G. *A Bibliography of Writings on the English Language from the Beginning of Printing to the End of 1922*. 1927. New York: Hafner Publishing Co. 1967.
- Mathews, Mitford, ed. *A Dictionary of Americanism on Historical Principles*. Chicago: The

- University of Chicago Press, 1951.
- Murray, James A. H., et al. *The Oxford English Dictionary*. London: Oxford University Press, 10 vols., 1884-1928; 13 vols., 1933.
- Neilson, William Allan, et al. *Webster's New International Dictionary of the English Language Second Edition Unabridged*. Springfield: G. & C. Merriam Company, 1934, iv-vi.
- Ogilvie, John. *The Imperial Dictionary, English, Technological, and Scientific; Applied to the Present State of Literature, Science, and Art; on the Basis of Webster's English Dictionary*. Glasgow: Blackie and Son, 1850, 2 vols.
- Ogilvie, John. *The Imperial Dictionary of the English Language. A Complete Encyclopaedic Lexicon, Literary, Scientific and Technological*. New Edition, carefully revised and greatly augmented, edited by Charles Annandale. London: The Gresham Publishing Company, 1899, 4 vols.
- Richardson, Charles. *A New Dictionary of the English Language*. London: William Pickering, 1836-1837.
- Webster, Noah. *An American Dictionary of the English Language*. 1828 Tokyo: Kodansha, 1976.
- Whitney, William Dwight et al. *The Century Dictionary. An Encyclopedic Lexicon of the English Language*. New York: The Century Co., 1889-91, 6 vols.
- Worcester, Joseph E. *A Dictionary of the English Language*. Boston: Hickling, Swan, and Brewer, 1860, 1 vol.; Boston: Brewer and Tileston, 1874, 1 vol.